

平成 28 年 5 月 21 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム

平成 28 年度第 5 回

「足るを知る」流れ

最近、中斎塾フォーラムの基本理念「足るを知る」と同調する流れが世の中はかなり広がってきたと感じます。一つの例として、ウルグアイのホセ・ムヒカ元大統領について書かれた本をご紹介します。『ホセ・ムヒカの生き方と言葉』（メディアソフト社）です。「世界で最も貧しい大統領」としてマスコミが取り上げていますから皆さんもお聞きになっておられるでしょうが、その壮絶な生き方に驚くと同時に、世間に警鐘を鳴らすような名言も素晴らしいと感じます。

「よりよい生活とは、より多くの物を持つ事ではなく、より幸せになることです」

「貧乏な人とは、少ししか物を持っていない人ではなく、多くの物が必要で、無限の欲がある人です」

「人生は貰うことではなくてあげること。どんなに酷い状況にいても他人にあげられる何かがあります」

ホセ・ムヒカさんは元ゲリラで、逮捕投獄され、13 年間獄中にいました。トイレもベッドもないコンクリートの室の中に閉じ込められ、狂いかけたとのことですが、そういう体験をした人の言葉だからこそ、その言葉は重みを持っています。

もう一冊ご紹介する本は、城山三郎さんの『粗にして野だが、卑ではない』（文春文庫）です。国鉄総裁だった石田禮助さんの半世紀を描いています。石田禮助さんは明治 19 年に生まれ、国鉄総裁になったのは 78 歳の時です。6 年 3 ヶ月の間、国鉄総裁を務めました。国鉄総裁就任時、石田禮助さんは給料は要らないと固辞したそうですが、周りから説得されて渋々受け取ります。しかしその後、国鉄が大事故を起こしてからは、人さまの命を預かる仕事をして給料を貰っているのは我慢が出来ないと、自分の主張を通したそうです。

「粗にして野だが、卑ではない」とは、国鉄総裁として初めて国会に登院した時の演説で自己紹介した言葉です。その演説で石田禮助さんは国会議員を前に、「国鉄が今日のような状態になったのは、諸君にも責任がある。答弁することのできないような難問を出されたときには、私は知らぬと言う。うそも言わない。その点は御承知願いたい」と言い放っ

ています。国会議員に対して「先生」ではなく「諸君」と言うくらいですから、実に痛快な人生を送ったのだと感じます。

石田禮助さんとホセ・ムヒカさん、その考え方や生き方にはかなり似ている部分があります。ホセ・ムヒカさんは大統領の報酬の90%を寄附して、残りの10%で生活をしています。尚且つ、大統領として受けられる無料パスのようなものは全て返上しています。石田禮助さんも、全日空や日本航空や東武鉄道などの無料パスを全て断ったそうです。

世の中には収入を得るために、自分で汗して働いて給料を稼ぐ人と、税金を戴いて収入にしている人がいます。同じお金でも中身が大分違います。氣をつけなければいけないのは、人間は知らず知らずの間に金銭感覚が変わります。最近の官僚は、知らない間に自分たちの給料を上げています。年金も自分達だけは守っています。一体、この国はどうなっているのかと思います。お金について、ちょっとでも多く欲しいと思うから、政治家も官僚も卑しくなるのです。舛添都知事の公費流用はその極みです。法的に見れば問題ないように処理したのですが、常識で考えたら誰が見てもおかしいですから、＜法的に見て問題なし・問題がある＞という観点はやめたらよいと思います。

石田禮助さんのような「粗にして野だが、卑ではない」という人生を送った人は、他にも沢山います。少し形は違いますが、「粗にして野だが、卑ではない」そのままの映画を先日観ました。「殿、利息でござる」という映画です。仙台藩の庶民が殿様にお金を貸して利息を得るという内容ですが、実話だそうです。原作は、磯田道史さんの書かれた『無私の日本人』という本です。

江戸時代中盤になると、日本中どこの藩もお金が無くて喘いでいました。結果として、優秀な官僚が出てきて藩の財政を救うという話がいくつもあります。もともと藩に仕えていた官僚は、だいたい藩を潰してゆく方向で財政を立て直しました。ところが民百姓から出てきたような人達は、本当に財政を立て直す動きをしています。山田方谷もそうですね。

「殿、利息でござる」の舞台となった吉岡宿は宿場町で、年貢のほかに伝馬役という課役（お上の物資を宿場から宿場へ運ぶために、人工や馬を自腹で賄った）によって困窮していました。夜逃げをする者が増え、残った者たちは更に負担を負って、町全体が潰れかねない状況になっていました。その中で、何とか町にしがみついて生きていこうと考えた主人公たちが奇策を考えます。皆でお金を少しずつ貯めて、貯めたお金を殿様に貸し付けて利息をとり、それを平等に分けて皆が生きていけるようにしたい・・・、主人公たちが奮闘しながら、どんどん協力者を得ていくという内容です。実際に1000両をお殿様に貸し付けて、藩は60年間利子を払い続けたという事実をもとにして本が書かれています。

町の危機を救うために自分を捨てて皆を助ける・・・主人公の兄弟二人の無私の心を育んだのが、父親から読み聞かせられていた「冥加訓」という書でした。「冥加訓」は関一楽という儒学者が書いたもので、「善を行えば天道にかなって冥加があり、悪を行えば天に見放され罰が与えられる」という教えて、陽明学がベースになって書かれています。冥加訓には、「人は万物の霊長であるから、牛馬を苦しめ、その背中に乗るような可哀想なことをしてはならない。ましてや駕籠のような人間が人間を苦しめるようなものに乗ってはならない」といったことも書かれています。

こういう映画が流行るのも、時代が求めているからだと感じます。今の世の中、日本の国だけでなく世界全体に、私利私欲で生きていく富裕層といわれる人たちは人間としておかしいじゃないか、という声が出始めています。アメリカで起きた反格差デモで、「1% V S 99%」と書かれたプラカードがありました。1%とは超富裕層、利息が利息を生む世界です。対して、99%とは額に汗して働く人々です。

日本の場合は今、年収200万が貧困のボーダーラインですね。国がそういう方向で動いています。ひと頃は600万でした。それが400万になり、今や200万円以上を中流層と言い、200万以下を貧困層と言う、だんだんそこに落ち着いています。平均年収も下がり続けていますから、そのうち中流といわれる中間層がなくなり、国民の殆んどが貧困層になると考えられます。そして、ごく一握りの富裕層がドーンと跳ね上がります。そういう二極分化がもう限界に来ているから、私はお金がお金として機能を果たさなくなると思っています。ですから、どこかで何か良い智慧が湧くはずだと思っています。

昨日、猪瀬理事長と中曽根康弘先生の事務所に行きました。40年近くお付き合いをしている中曽根先生の秘書の方と色々お話をし、その辺りについて中曽根先生がどうお考えか伺いました。そうしましたら、資本主義も共産主義も終わりという判断はごく当たり前だと言っておられるそうです。ただ、何主義ということではなく、これから技術革新がどんどん起きるからその中で新しいものが生まれるでしょう・・・といった話をされているとのことでした。機会があれば中曽根先生にお会いして、直にお話を伺いたいとお願いしてきました。

ということで、お金が世の中を動かしている時代は、そろそろお終いです。二極分化が進めば進むほど、お金の価値は失われ、ある日突然世界が破綻するよう思えてなりません。そうになると、以前から申し上げている自給自足が鍵になります。

前回、昭和21年2月17日の新聞について話をしました。日本でどういうことが起き

たか・・・。歴史は繰り返すで、お金が凍結され食糧も統制される時代がまた来ると私は考えています。これは日本だけでなく世界的な流れです。人類がこれだけ多くなり過ぎている中で、発展途上国と言われる国々全てに食糧が行き渡るといふことはあり得ないからです。

日本が経済破綻を起こす。食べ物が行き渡らない時代が来る。そのために私は、自分の関係する 3000 人くらいの人たちとその家族、1 万人分くらいの食糧を自給出来るような組織を作りたいと考えて、農業法人を立ち上げようと動いています。食料を売って利益を上げようとするのではありません。自分に関係する人たちが生き延びられるためのものを作りたい。そういう志のある者を集めて組織を作る動きをしています。それは、中斎塾フォーラムでお話していることを単純に実践しているわけです。

そういう動きは今、どんどん広がっています。あと 5 年もすれば、ごく当たり前になると思っています。しかしながら農業法人の立ち上げには、実際動いてみると、手かせ・足かせが多すぎます。行政組織が関与するものは、どうしても前例踏襲、しきたりで動いているから新しい発想が入らないように感じます。

今、世の中の秩序・仕組みがガラガラと変わるような状況になっています。それに対応できるように頭を柔らかくしなければいけないと考えます。その時のポイントが、今日ご紹介した本『粗にして野だが卑ではない』のものの考え方で、中斎塾フォーラムの基本理念「足るを知る」「ほどほど」に相通じると考えています。世間に広がっている「足るを知る」と同じ考え方、相通じる動きを探してみるのも良いと思います。

恒例の質問

今年に入ってから今日まででお答えください。

- 今年に入って、あまり嘘をつかなかった方
- 今年に入って、比較的良い日が続いていると思う方

何度も申しますが、良い事と悪い事を天秤にかけないで下さい。念仏婆さんの話は御存知ですか？ いつも南無阿弥陀を唱えていたお婆さんが亡くなって、閻魔様の前に連れて来られます。お婆さんはいつも念仏を唱えていたのだから、地獄へ送らないで欲しいと訴えます。すると閻魔様が「お前が唱えた念仏はどれも空念仏で、本気で唱えていなかった。けれど、一度だけ心の底から南無阿弥陀仏を唱えたことがあるから、極楽へ行くチャンスをやろう」と言ったという話です。

天秤にかけたら空念仏ばかりですが、本気の念仏は重いとお考え下さい。本物がどれだけあったかで判断すれば良いのです。ですから良い日と悪い日を天秤にかけないで、心の

底から良い日だったなとか、良い事にめぐり合ったなと思ったら、それは他の悪いことを飛ばしてしまうだけの重みがあります。

○ 今年に入ってから、有難うと言ひ・有難うと言われることが多かった方

報酬を求めないで何か人さまにしてあげて、その結果、有難うと言われた時はとても嬉しいものです。また、有難うと言う時には、相手にも良い心持ちは伝わるように、心を込めて言われるとよろしいですね。

○ 今年に入って、毎日何かしらの健康法をしている方

ある程度の年齢になると、毎日 1 時間位は身体の手入れをしないといけないようです。私は今、筋肉の強化のために毎日自転車に乗っています。まだ 2 ヶ月ですが、驚くほど筋肉がついて来ました。筋肉をつけるのに年齢は関係ないようです。

○ 昨晚寝る時に、明日以降を過去形でイメージ出来た方

○ 今年に入って、自分磨きをしている方

自分で自分を磨かないといけません。自分磨きは、切磋琢磨と啐啄同機がキーワードです。

詐を逆えず、不信を億らず

では、解説を致します。本日の論語は憲問篇 31~34 です。

先程の素読もスムーズに読んで戴きました。あとは状況をイメージし、その人物になりきって声を出すと更に良いと思います。

【三一】子貢 人を方ぶ。子曰く、賜や賢なるかな。夫れ我は則ち暇あらずと。

子貢が人を比較した。

孔子が言いました。「お前は賢いものだから、そんなことは自分で考えなさい。私はそんな暇はない。」

子貢は口八丁手八丁で自分が優秀だと思っていますから、ついつい人の優劣をつけたがるのでしょう。孔子に、自分はどうかと聞きたいわけです。それに対して孔子が、そんな暇があったらもっと勉強しなさいと皮肉を言っています。

現代に置き換えて、舛添都知事で考えます。舛添さんは法律を検討して、これなら追及されないだろうと思って私的流用をしたわけです。自分の奥さんの会社に事務所家賃 44 万円を支払うなど、法的に問題はないとしても常識的におかしな話です。孔子ならば「お前は賢いねえ、私はそんなやり繰り算段をする暇はないよ」と皮肉ったでしょう。政治資金を使って蓄財をするならば、もっと他の仕事をしなさいと読めばよろしいでしょう。

【三二】子曰く、人の己を知らざることを患えず。其の能くせざるを患う。

孔子が言うには、自分はどのようにして世の中に知られないのだろうと心配せずに、自分に能力が無いことを自覚して、自分を磨きなさい。

恒例の質問でもお聞きしている「自分磨き」ですね。私は体力的にはせっせと磨いています。頭の方は、残念ながら知らないことが多いこと多いこと。先ほどお話した映画に出て来た関一楽という陽明学者も知りませんでした。自分をもっと磨きたいというより、もっと知りたいという気持ちが強いと思います。

世の中を見渡してみると、中身がないのに自己PRばかりしている人間が沢山います。世の中に名前を出す一方の時は、自分磨きが出来ません。ですから世間に名前が知られてくるといことは、中身がどんどん薄くなるのと同じで強いています。皆さんも世の中に名前が出て来たと感じたら、もっともっと自分を磨かなければいけないと思った方がよいでしょう。

【三三】子曰く、詐を逆えず。不信を億らず。抑も亦先ず覚る者は、是れ賢なるか。

孔子が言うには、この人は自分を騙そうとしていないかと用心しない。人が自分を疑っていないか、信用していないのではないかと気にしない。それでいて、人より先にその心持ちが分かるようであれば、賢者と言える。

何事でも、人よりちょっと先に気がつく、人より先に発見したなら、それを保護する仕組みがありますから、例えば商標登録なり特許なりを申請する。ちょっとしたヒントでどんどん広がっていきますから、気がついた時にまず実行することが肝心です。陽明学は、何かはっと思ったら行動することに尽きます。

東芝の粉飾決算、三菱自動車やスズキの燃費データ改ざんなど、「詐を逆える」「不信を億る」ような人が沢山います。ならば自分一人、自分に関係する人くらいは、さっぱりしているのがよからうと思います。今の時代、どうにもならない生き様をしている人と、清々しい生き方をしている人と、対極に分かれている気が致します。我々は、爽やかな生き方をする集まりでありたいと感じます。

【三四】微生畝 孔子に謂いて曰く、丘 何ぞ是の栖栖たることを為すか。乃ち佞を為す

無^なからんやと。孔子曰く、敢^{こうし}て佞^いを為^なすに非^{あら}ず。固^こなるを疾^{にく}みてなりと。

微生畝は魯の人で孔子の郷里の先輩になります。

微生畝が孔子に、「お前は何故あちこち動き回って落ち着かないのか。自分を取り立てて貰おうと思っているからではないだろうね」と聞きました。

孔子が、「決してそんなことはありません。ただ、かたくなな態度をとっているのが自分は嫌なのです」と答えた。

郷里の先輩の横柄な物言いに対して、孔子は「私は言葉巧みに取り入ろうとしているではありません。自分が世の中のためになると思うからやっているだけです」という答え方をしています。

荻生徂徠の解釈では、長幼の序を重んじる孔子に敬われていると思い、上から目線でものを言っている微生畝に対して、遜って答えている孔子を偉いと評しています。

大してものも知らないのに、歳をとっているというだけで上から目線で言う人が多いですが、これは考えものだとお考え下さい。出来るだけ同じ目線で話をするのがよいと思います。ただ私の周りの年輩の先生方を見ると、頭が低く態度が穏やかな方が多いです。長生きする方は、どういう訳か穏やかで物静かな人が多いと感じます。特に世のため人のためと思って動いている人は、そういう雰囲気になるのだと思います。

自分自身の判断は？

先程お話した石田禮助さんについてもう少しお話します。石田禮助さんは明治 19 年に生まれました。三井物産に 35 年間勤めて、最後は社長を務めています。その後、78 歳で国鉄の総裁になりました。数え 93 歳で亡くなりましたが、三井物産でも国鉄でも大変な業績を挙げたにもかかわらず、本人の遺言によって、葬儀は三井物産から 3 名、国鉄から 10 名が参列しただけで、質素に執り行われたそうです。

石田禮助さんの晩年の健康法は、毎日屈伸 20 回、身体をひねるのが 20 回、若い頃から剣道をしていたので素振りを 300 回、更に、国鉄総裁になるまでは水浴びをしていたそうですが、総裁になってからは、周りから言われて冷水摩擦に切り替えたそうです。

三井物産を辞めてから、神奈川県^の国府津の自宅で農業を始めて、最後は自分を「一介の農園主」と言っておられたそうです。

石田禮助さんの考え方・生き方を貫くものは、「粗にして野だが卑ではない」です。石田禮助さんが特に嫌っていたのは、「卑」（私利私欲で動くこと）です。知らず知らずの間に

私利私欲で動いていたと自分が感じたなら、とても耐えきれなかったのでしょうか。特に、大きな企業のトップになったら報酬は受け取るべきではない、という持論があったようです。ですからご自身も国鉄総裁になった時に、報酬を受け取らなかったのでしょうか。また、国鉄総裁の時に何度も叙勲の話があったそうですが、山猿（の自分）には勲章は似合わないと思っています。そのベースにあるのも、「卑」か否かです。タダでものを貰うのは卑しい。給料もそれ相応の仕事をしたのなら貰ってよいが、仕事以上の報酬を受け取るのは卑しいという信念を貫き通した。そこが非常に潔く、面白い人物だと思います。

今日のテーマは「判断の三原則」です。ものごとを判断する時には、本質・大局・歴史から考えるといつも申し上げています。石田禮助さんは、「卑しいかどうか」が一つの判断基準になっていた。「卑しいのは嫌だ」という信念をずっと貫いたわけです。

ホセ・ムヒカさんはどうでしょうか。ご紹介した本に、ウルグアイの女性がヒッチハイクをしたところ、乗せてくれた運転手がホセ・ムヒカ大統領だったというエピソードが書かれています。今回の伊勢志摩サミットでは、大統領や首相を乗せた車がどの道路を通行するか分からないように、全ての道路を舗装し直したそうですが、おかしな話だと思います。いずれにしても世界各国の大統領には、テロに狙われるという意識がこびりついています。ホセ・ムヒカさんは、もちろん護衛はつけていません。ごく当たり前で街なかへ買物に行ったりしています。

習近平首席は狙われっぱなしですから、最近は大変数の護衛がついているようです。最近読んだ記事には、李克強首相が全人代で演説した時、習近平の名前を読み間違えたため、演説が終わっても習近平主席が拍手をしなかったとありました。また、新華社通信が「習近平は最高の指導者である」とすべきところを「最後の指導者」と誤植して配信したという記事もありました。これらは単にミスが重なっただけなののでしょうか。中国貿易のエキスパートの方にお聞きしますと、「それはあり得ないので、確信犯でしょう」と言っておられました。

もし北朝鮮でそういうミスがあれば、粛清されてしまうでしょうね。特に、軍に対する粛清は見せしめのためにやっているのだから、残忍きわまりないものです。ISISの自爆テロ以上に強烈に世界に残酷さを植え付けていると感じます。

今の世の中は本当に両極端です。富の視点で見ても両極端になっていますが、戦争の観点で見ても、ひと頃とはまるで違っています。先日、ナイジェリアでボコ・ハラムに拉致された女子生徒の一人が、赤ん坊を抱いて保護されました。拉致や人身売買をごく当たり前に行っている組織、人を人として扱わなくなっているという状況が、両極端でどんどん

進んでいると感じます。

ですから日本という国は、よい国なのでしょうね。しかし、いつ何時、テロが起きるか分かりません。I S I Sが今年ヨーロッパを意識的に狙っているという専門家の見解が出ていますが、それがアジアに向いたなら日本は格好の獲物です。日本に焦点を絞られたなら、至る所でとんでもないテロが起きます。

日本という国は何事かが起きてから過剰反応を始めますから、その時におそらく政府が憲法改正を上程するのだらうと思います。だいたい、国が何か大きなことを決定しようとする時は、とんでもない事件が起きて国民の眼がそちら向いている間に、やりたい事をスッと通してしまうのです。大災害が日本に起きた時、北朝鮮が日本を攻撃した時、I S I Sのような過激派集団が日本に対してテロを仕掛けた時・・・そして、それによってもの凄く数の日本人が死んだ時は、自民党内閣がそういう方向へ突っ走っていく。そういう動きが生まれると思っています。これは判断の三原則（本質・大局・歴史）から導き出しています。

この辺りの話を、6月4日の群馬郷学会の講演と6月19日の岡山県の高梁方谷会での講演でお話しするつもりです。そして、8月20日の中斎塾フォーラム10周年記念式典で「これから時代はこう変わる」と題して、まとめをしたいと思っています。

話をする時には、＜私はこうして判断している＞と言えなければいけません。1000年単位で歴史はこう動いている、100年200年単位でこう動いている、安岡千支学では60年周期でこう動いている・・・三層の見方から世界全体を眺めてみる。そうすると、人類の数は多過ぎる。日本人の人口1億2000万も多過ぎますから、8000万くらいまで一気に落ちていくのではないかと思っています。世界が理想とする社会は日本の江戸時代後期だと言われています。つまり4000万人くらいで、自給自足の生活です。日本には過去そういう時代があったのですから、それをお手本として進んで行く時代に来ています。

だとしたら今、我々はどうすべきか・・・。一つは自給自足体制をつくる事です。そして世のため・人のためにベースに動かなければ、人類はどんどん滅亡する方向に向かうと考えます。それを救えるのは「足るを知る」という考え方、或いはそれに類する考え方です。「足るを知る」という考え方が日本を救い、人類を救う。そして、日本の中で一番の柱になるのは、おそらく天皇陛下・皇后陛下の存在ではないかという感じがします。

話しがあちこちに飛びましたが、皆さんもご自分の行動を決める時に、自分自身の判断が凄く大事です。その判断は、＜私利私欲かどうか＞をベースで考えられると良いでしょ

う。日本には無私的心を持った人が沢山います。自分より他人のことを考える。自分より他人のことを心配する。もともと政治とはそういうものだと思います。政治の要諦は何か。心の底に「世のため人のため、自分のことは顧みず」ということがあったなら、政に参画しても良いと思っています。私欲のために政に参画するのであれば、政治家の資格はありません。今の国会議員の人たちはというと、クエスチョンマークがつく人が多いなと思って見えています。

是非とも中斎塾フォーラムは私利私欲なしの集まりでありたい、そう申し上げて本日の講話を終了致します。有難うございました。